

六本松地域におけるまちづくりの夢・アイディア ～『文化・教養』をキーワードとしたまちづくり～

1. 背景～六本松地域の特性と九州大学の移転

六本松地域は九州大学や大濠中学・高校などが立地する文教地域であり、大濠公園、護国神社が位置するなど良好な環境に恵まれた地域である。城南線、国道 202 号線、油山観光道路が交差し、平成 17 年に開通した地下鉄 3 号線（七隈線）の六本松駅が位置するなど交通の要衝でもある。

その六本松地域が大きな転機を迎えようとしている。平成 20 年度に予定されている九州大学六本松キャンパスの移転である。六本松のまちは九州大学とともに歩んできた。今や九州大学六本松キャンパスは地域の顔ともいえる存在である。その移転によって顔のない街になってしまうのではないかとの懸念もある。本稿では地域住民の一人として九州大学の移転後の六本松のまちづくりについて語りたい。

2. 将来の六本松地域に抱く夢とアイディア

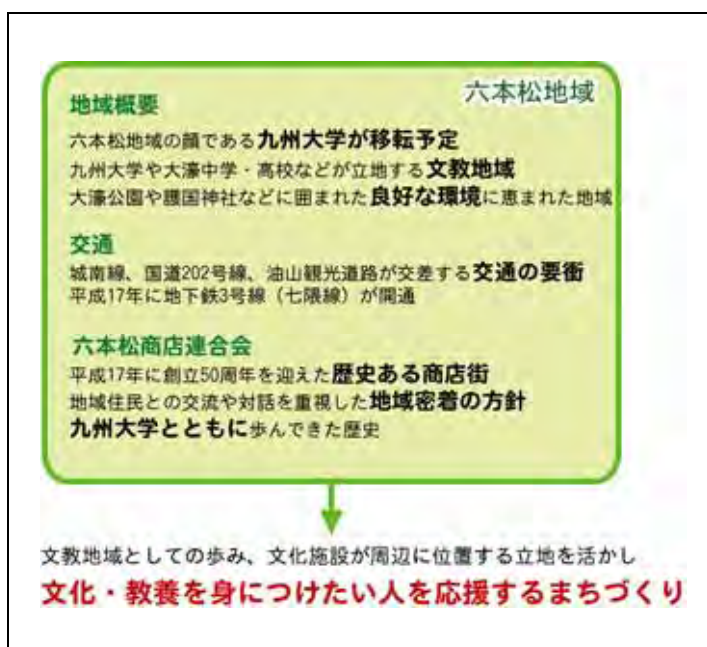
(1) 九州大学とともに歩んできた歴史の継承

六本松地域のシンボルともいえる九州大学教養学部の移転は、地域アイデンティティを大きく失わせる恐れがある。九州大学移転後に全く新しい街へと生まれ変わるという考えもあるが、長年九州大学とともに歩んできた歴史を簡単に変えてしまうのではなく、生かしていく道はないのだろうか。

「九州大学とともに歩んできた歴史」を語る上で、欠かせないのは 50 年以上の歴史を持つ六本松商店街の存在である。六本松商店街は長年にわたって学生たちに「食」を提供してきた。長年学生を応援してきた商店街の基盤は将来的にも活かしていくべきではないだろうか。

「食」だけでなく、もちろん「住」の面でも九州大学と地域の関わりは大きい。今では大半となったワンルームマンションに、そしてかつては下宿や間借りに学生が生活していた。近所に下宿していた九大生に遊んでもらったこと、友人と大学祭に出かけたことは私の中に九大に関わる思い出である。九州大学と歩んだ歴史は地域住民の心に刻まれている。同様に、九大の出身者の多くが六本松地域に関わる何らかの思い出を持っているのではないかと。

多くの人の記憶に残る現在のまちの基盤を白紙にせず、それを活かし「九州大学と歩んだまち」の歴史を継承することが、私が考える六本松地域のまちづくりの理想像である。



(2) 『文化・教養』をキーワードとしたまちづくり

「九州大学と歩んだ」まちの基盤を活かし歴史を継承するまちづくりとして、「文化・教養をキーワードとしたまちづくり」を行うことが私の提案である。

六本松は前述の大濠中・高校や地下鉄 3 号線やバスを利用するその他の高校・大学（中村大学や福岡大学など）の学生の通行が期待できることから、若者が留まる魅力を創出し、九州大学移転後も現在の

賑わいを維持したい。

若者が集う魅力として、更に若者だけでなく老若男女を集める核として、九州大学六本松キャンパスが「教養学部」であったこと、また六本松のすぐ北側の徒歩圏内にNHK福岡放送局や福岡市美術館などが位置すること等を踏まえると、「文化・教養を身につける人が集うまち」というキーワードが浮かびあがってくる。

勉学に励む若者を長年支えてきたまちは、「**老若男女の文化・教養を身に付けたい人を応援できるまち**」になれるはずである。

(3)「文化・教養を身に付けたい人を応援するまち」のイメージ

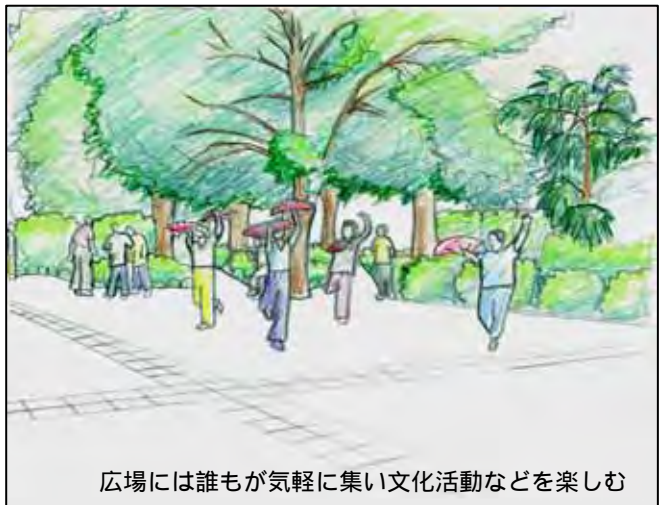
アイディアとして幾つかのまちのイメージを述べる。

①文化・教養を身につけたい人が集まるまちのイメージ

・六本松地域の中心には誰もが気軽に利用できる広場がある。早朝に多くの人が自然と集まり、ラジオから流れる音楽に合わせてラジオ体操が始まる。また広大な広場の別の場所では太極拳を楽しむ人々がいる。

・六本松地域にある学習スペースに福岡市全域から学生が集まる。高校生や大学生だけでなく、資格試験を受験するための勉強に励む社会人の姿も多い。

・多くの人が六本松で開催される講演会や文化サークルに訪れる。講師の中には六本松に思い入れのある九州大学の関係者もいる。



広場には誰もが気軽に集い文化活動などを楽しむ

②文化・教養を身に付けたい人を応援するまちのイメージ

・美術館や武道館、大濠公園でのイベントに行く人は必ず六本松駅を利用する。六本松には割引券の配布など施設の利用に便利なサービスがあり、また六本松の商店街での買い物、商店街を美しく彩る花や緑を楽しみながら目的地へと足を運ぶのも楽しみの一つとなっている。

・食事時になると、サークルや学習に来た人達が六本松商店街へと一斉に繰り出す。夕方になると、商店街で買い物を済ませてから帰路につく人も多い。



文化・教養を身につける場・機会が多くある

3. 終わりに

以上、将来の六本松に抱いている夢・アイディアを自由に述べたが、どのような方向性であれ九州大学の移転後の六本松がアイデンティティと賑わいを失うことなく発展していくことを望んでいる。

以上